
学校生活を君と

薫琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校生活を君と

【Nコード】

N6183J

【作者名】

薫琉

【あらすじ】

中学3年生の秋は憧れだった同級生みつきと付き合います。時には一緒に勉強したりケンカもしたりと仲良く学生生活を送っている。しかし誰もが気づくはずもないみつきの本性が露になっていく。

ほのぼので短編を少しずつまとめて生きたいです。
この小説にウザサを覚えたら嬉しいです。

1日目 あの日より君を好きになる

「ねえ…みつき。最近ストレス溜まってない？」

「はい……？」

「最近文化祭準備で疲れてるし部活にも全然来てないじゃん。

だからストレス溜まってると思ってる……」

「そっそんなことありませんよ」

「嘘つき！私が今日の文化祭準備全てやるから部活行ってきてストレス発散してきなさい！今日教室に帰ってきたら文化祭の計画を破綻にさせてやる」

「そっそんなむちゃな……」

くあの日より君を好きになるく

「みつきはいつも難しそうな本ばかり読んでるよねく」

静かな図書室。いるのは私とあなただけ。

こうして私があなたの隣にいられるのを許されてるのは嬉しいんだけど

あなたは別な物に夢中だからついつまらなそうに溜め息をつく。

「こんなの…たいしたことありませんよ。それよりあなたもこの論理学の本を読みませんか？この著者は経済学を主本に書き……」

分からない話に突入されて私はあなたの話に合わせるのに一苦労。整った顔立ちに優しい性格。みんなからも人気が高い彼は生徒会長であり私の彼氏でもある。名前はみつき。

なんかこんな難しい話されても、あなたの優しい笑顔で熱弁される

とつい聞き惚れちゃうんだよね…。

「みつきってこんな所いて楽しい？」

「えっ…それは楽しいですよ。本をたくさん読むことが出来ますし何より秋と一緒あきにいられますからね」

さらりつと恥ずかしいことを言われた。

なんでそんな笑顔で言うんですか？

「そんな顔を赤められると可愛いですね」

「うっうるさい！」

「冗談ですよ？」

「あつまたからかって」

あなたからむけられる視線はいつも優しくてこんなふざけあう会話もいつもの事。けどね。私いつも不安なんだよ。勉強もできないし一見地味な私と付き合っていることあるのになって。同情だったら悲しいもん。

「ねえ…みつき…ずっと前から聞きたかったんだ」

「なんですか？」

「何で私なんかと一緒にいるの？みつきは勉強もスポーツも出来るからもっと可愛い女子と付き合った方が良いじゃん。」

本当に疑問だった。勉強も中の下。スポーツもてんでダメな私のどこが いい のだろう。

みつきはそんなこと…とでも言うような当たり前の顔をした。

「あなたといると楽なんですよ。癒し効果があると言うんでしょうか？僕の場合は相手のことばかり考えて自分の一歩が踏み出せない

んです。だけどあなたは僕の変化に気付き、僕に気付かせてくれた。それが嬉しかったんです。」

ああ…また反則的な笑顔で私を見つめるあなた。

「あつまた顔が赤くなってますよ？」

「うっうるさい！」

「可愛いですね」

私の心配はあなたの笑顔で吹っ切れそうです。

2日目 超えられない一線(前書き)

甘く仕立てました。甘さの限界に挑戦したつもりです。

2日目 超えられない一線

「学年末テスト…スゲー悪い…。秋は？」

「私はいつも通りかな…ハハッ」

「悪いって事ね。そういえばみつки、また学年1位だって」

「そうなの！？」

「勉強教えてもらいなよ。彼女なんだし！そうと決まれば早速みつき〜！」

「ちよつと！？優奈！？」

「越えられない一線」

「だからそこはX||3になるんです。またこの解の公式は問い4にも使えるわけで…」

みつきの一生懸命の顔はいつみてもかっこいい。

勉強中だとあってかけている眼鏡はよりいっそうかっこよさが増すだけ。

「どうしました秋。疲れましたか？」

「そんなことないよっ。続けて！」

「?…疲れたらすぐ言ってくださいね。」

ニコツと笑ったみつきは優しさに今日もあふれています！

もともとこうなったのは私の友達ー優奈から始まったものだった。

優奈がみつきに「勉強教えて？」と頼んだ。

メンバーは私と優奈。そしてみつきと優奈の幼なじみの蓮君での勉強会のはずが優奈と蓮君は都合が悪く来れなくなってしまった。気

付いたときにはみつきの部屋に通されて帰れない状況。男の部屋つてもうちょっと汚いかと思ったけどみつきの部屋は無駄な物が何一つない。整理整頓されていて私の部屋とは大違いだ。

なんか心臓にも悪い。至近距離にみつきの顔があって気が気でない。部屋の匂いもみつきで、なんかくらくらしちゃう。

そう思ってるのとみつきと自然に目がい、みつきはにやりっと口端を釣り上げた。

「どうしました？そんなに僕の顔がかっこいいですか？」

「自分で言うんですか？みつき先生」

「…といっても秋には負けますけどね」

「ちよっ!？」

「冗談ですよ」

それはどういう意味の冗談？

さらりっと恥ずかしいことを言われさらりっと優しく微笑む。

優しい存在。まるで柳に降り注ぐ風のように。

「なんで優奈達来れなかったんだろう…」

「もともと言えば蓮は優奈さんが目当てですからね…。優奈さんがいないならここに来る必要がないと感じたんでしょう」

「えっそうなの？」

「僕の観察眼をなめないでくださいよ。一度覚えたことも忘れませんから」

こことこの問題も解いてみてくださいーとみつきが優しく指示する。そこは学年主席。脳の造りが違うのかも知れない。にしても蓮君は優奈のことが好きなのか。優奈は他人にはせかすくせに自分のことになるとうといからなあ。

「それに：蓮達には悪いですけど僕は嬉しいですよ。あなたと二人でいることが出来て…」

「みつつき…?」

「最近勉強ばかりで秋のこと構ってあげられませんでしたからね。そういう形であれ二人でいられる時間ほど僕にとって幸せなことはありませんよ」

「私もなんだよ？みつつき」

私こんなこといってないよ？

みつつきと目をパチクリさせながら話がするところを探っていた。

「本当いつもみつきって女子に囲まれて私と話する暇もないじゃーん。悲しいんだよ！みつつき私だけを見てほしいのに勉強、読書、友達って優先順位違ってるんじゃないの？？そんな観察眼持ってたって私のこと大切にしてくれないんじゃない意味ないってーの。もっと秋のことたいせつにしー………」

「優奈？何してんのよ………」

「蓮も…どうやって入ったんですかー……」

机の視覚からじゃとらえられない。

ベッドの端のところで体育座りをしながら楽しそうに話す優奈と見つかったことに蒼白する蓮君が目に入った。

「私は悪くないのよ。だって蓮がやろうっていつてきたのよ？ねっ蓮？」

「えっ……え」。まあそうだよ」

顔を赤める蓮君。優奈の計画だって分かるよ……すごく。まあその話は置いて気にかかるのはその先。なんでそんなこと言ったのよ。みつきには聞こえないように私は優奈と小言ではなした。

「なんでこんなことしたの？優奈」

「だって、秋最近切なそうな顔するんだもん。そこは親友の私が助けてあげようと思ったんだよ。これが秋の本音かなーと思って」

「そんな事思っ……っ！？」

「思ってるでしょ？自分のことはちゃんと気付よ！純情少女！じゃ私たちは退場します。おじやましました」

「ちょっと待って」

優奈の早くの帰りに蓮君も急いで追いかけるように出て行った。残ったのは……私とみつきだけ。

「そっそれじゃ続きしましょうか？」

「うっうん」

なんかよく分からない空気が流れてる。

これも全て優奈のせいだよ。

「「あのっ」」

言葉があってしまったことについてそっぽを向いてしまう。

「なんですか？秋」

「みつきからでいいです。はい。」

みつきを見れば申し訳なさそうなあまり見たことのない顔をしていた。

優しい顔というよりそれは自傷的な切なそうな顔。

いやっそんな顔しないでー！

「僕は甘えてました。秋とつきあえたことに安堵して悪い虫がつかないことをいいことにどこか手放していたんです。確かに優先順位も間違っています。勉強、友達、部活だってあります。秋：クラスも違う僕といられる時間なんて少ない。秋にそんな思いさせるぐらいなら秋は僕と一緒にいないほうが」

「違うよ。みつき…」

「えっ…?」

「前『僕の変化に気付き、僕に気付かせてくれた。』っていったよね？みつきは私に心配させないように…って自由でいたかったんじゃないの？確かに私はみつきにとって優先順位が低いのかも知れない…でも、それでもいい。だって私にとってのみつきは勉強も出来て部活ではつねにメンバー入りしててみんなのことを大切にくれる。たった一人のために犠牲にしないみつきがいいの！それ以外のみつきはいらない。誰かのためのみつきなんていない。今のみつきが私は好きなの!!」

言ってしまったー…………。

「それは…今のままの僕でいいというか…改めての告白ですか？」

みつきは信じられなそうな顔をした。自分でも何言ってるんだろうと思う。でもここでひけない。

「うん！私はそんなみつがいい。私はみつが好きなんです！」

「秋…このまま抱きついちゃいたいです」

「えっ？？みっみつき？」

「冗談ですよ。正直な秋は一段と可愛いですよ？」

「それも…」

「冗談…なわけないじゃないですか」

あなたはいつだって笑って欲しい。

自分の道を歩いて欲しい。こえられない一線で止まって欲しい。
一番大切なのはあなた自身なのだから！。

3日目 エイプリルフル（前書き）

何故か先取りしすぎたエイプリルフル。甘いよ。
でも何故か書きたくなった。

設定では2年生で生徒会長だからもう3学期だ。

3日目 エイプリルフール

普段いわれてない言葉を投げかけられると心が痛む。

だからといって言い返すと好きだから言っていたこの気持ちでさえ偽りとなってしまうような気がして……。

午前と午後を挟んでの部活は最大部員をほこるテニス部にとって騒がしくもあった。午前の練習が終わりお弁当を食べようと使われてない第2体育館へと向かう途中でみつきを探す。確かもうそろそろ男子の練習も終わるよね……。いつもはみつきの方からやってくるのだが今日は来ない。なんでだろう……。

「秋〜どうした？今日はみつき君こないの??」

「優奈……きつと練習まだ終わってないんだよ」

「えっ?もう男子終わってるよ。体育館にもういるし」

どういうこと?どうして来てくれないの?いつもならちゃんと終わるまで待ってくれてそれは恥ずかしくもあったけど嬉しくもあったのに……。それに朝も…迎えに来てくれなかった…。部活が被るときには一緒にいこうとしてくれてたのに……。

「秋?よかったら一緒にお弁当食べよっか??」

「……うん」

私はなにをしてしまったのだろう。

＊

男子ばかりの弁当会はなんといってもむさくるしい。これなら秋と

一緒にいた方がましだ。いや、秋じゃないと嫌だ。円になるようにして3人の友達と座っていたのだが話のターゲットはいつもはこの場にいない僕に予先が有るようで…。

「おいゝみつゝいいの？彼女は」

隣に座っていた短髪の黒髪で爽やかな雰囲気を持つ友達―蓮がちゃかくように笑った。

「それじゃこの俺がみつきの代わりに秋ちゃんを誘っちゃおうかな」

蓮の隣に座る長髪を軽く縛っている周二は見たまんま軽い感じをもち僕の不幸を笑う。

「蓮、周二。人の物に手をだすほどあなた達は優れた立場にあるようですね？」

秋のことになるとつい口調がするどくなってしまう。蓮と周二は同じクラスで仲の良い分類に入る。この2人とは普段話すことはあっても弁当を食べることなどなかったのに。

「じょつつ冗談だよみつき」

「ほら早く弁当食べようぜ！」

2人の慌てた顔つきに僕は軽くため息をつく。早く時間が過ぎてしまえばいい。

「……………？どうしたの？みつき」

珍しくあまり話さない翼に心配そうな顔をされ我に返る。この翼は無表情でありながらどこか癒しの空気を持っている。翼からの影響もあるせいか周りの男子も顔つきが変わった。

「俺らも心配してるんだよ」

「まあせめての出来るみつきが俺らの中では神だからな。お前がいなかったらテニス部こんなに部員あつまんなかったよ」

蓮と周二がお弁当のおかずを食べながらさりげなく僕を見た。

僕の利用価値はそこですか！？ だけど心配されると種明かししづらいんですけどねえ。まあいいでしょう。

「今日は何日か知ってますか？」

「えっとー一日。エイプリルフル」

蓮が思い出すように言った言葉。その言葉に僕は楽しそうに笑った。

「嘘をついていいと言っても午前中だけなんです。その嘘がゆるさるの……。」

だから午前中は態度に表したくない。「好きだ」と言ってしまった時点で嘘と思えば悲しむ気がする。

だからといって「嫌いですよ」という言葉は絶対に言いたくない言葉。嘘だからといって「嫌い」という単語はどこか嫌な予感がしてならない。

午前中は関わらないようにしてたんですけどねえ。近くにいるのに触れられないのは、はつきりいつてつらい。でも触れられる距離まで来てしまったらきつと僕は伝えてしまう。とりあえず、昼食さえ終われば秋といわれるから……。早く終われ！ 十二時！！

「でもそういうのってつらくないか？ みつき」

「というより何も知らない秋ちゃんに悲しむと思うぞ」

蓮と周二の2人が目を細めつつかかる。

こういうところでは真面目になるところが僕が親しくしている理由でもある。

「日常が非日常になってしまったら……軋んじゃうよ……？」

今一番いいことを言ったのは翼だと思った。そのことに気付かない他の男子は「どういうことだよ」と翼にせまるわけだが……。

秋といつもいるという日常。君の名をすぐ側で呼ぶ当たり前のこと。君に触れることだって君と言葉を交わすことだって毎日のこと。それは日常と化していた。慣れすぎてしまった……。だけどそんな『日常』が崩れてしまったら、何かが軋んでしまう。自分の自己満足のせいで秋にどんな思いさせてるか……。

翼は僕の表情から何かを読み取ったように笑った。

「みつきは賢いから分かるよね。何が言いたいか」

「翼……僕行ってきます」

「おい！ みつき」

「何言っただよ翼？」

「そういえば午後……雨降るらしいよ……」

「「はっ?」」

時計は正午をすぎようとしていた。

＊

正午をすぎたことを知らせる町内に流れる鐘が鳴り響く。
あの人がいなくてどうしてこんなに悲しいんだろう……。

「どした？秋。食欲ないの？？」

「そっそんなことないよ……」

優奈の言葉に我に返る。自分の弁当箱を見れば半分ぐらいしか減ってない。もう少しで午後の部活が始まるというのに……。

「秋もしかしてみつきと何かあったの？」

「へっ……？」

「あんにゃろー私の秋になんちゅう顔させてる！釘差しが生ぬるかったようね」

「ちよっ優奈？そんな止めようよ」

勢いよく立ち拳をふりあげる優奈は恐ろしい。姉御肌の優奈は茶色がかった長髪の毛先がクルツとしていて大人な女子。よく私といってくる友達だが時々思わぬ行動に出るから目を離しておけない。というより、なんでみつきだってばれたんだろ…。

私は立ってる優奈をなだめるように立って座らせようと落ち着かせる。……が背中からまるで引き寄せられるような感覚に襲われてー

「僕の秋に心配そうな顔させないでもらいますか？」

「みつきー！！！！？」

腰あたり感じるのはみつきの腕を回されてるからで…後ろから抱きすくめられていた！？

「はっ！？なに言ってるのよ。あんたが秋にそんな顔させてるって気付かないの？それにその手離しなさいよ！」

その言葉にみつきはもっと体を引き寄せる。自分の顔がどんどん熱を持っていく。

ちよっハズカシイです。みつき。

「そうですか……僕が秋を。秋悲しいですか？」

みつきを見上げれば複雑そうなみつきの顔が至近距離で感じられた。私より15？も高いみつき。整った顔立ちが曇っていく。キレイな空が曇り始めるかのように……。

「悲しい……よ？」

「秋……」

「悲しいに決まってるじゃん。みつきがそんな顔してたら悲しい。みつきどうしたの？」

みつきがそんな顔をするってことは悲しいことがあったから。

みつきが驚いたように目を見開く。そんな時、体育館に勢いよく部長の声が響く。

「えっと…男子テニス部に連絡。なんか雨降ってきたから今日の午後の練習はなし！明日かわりに午前中あるから忘れずに来いよ！」
「女子もそうだから！もう今日はさっさと帰ることー。ってみんな聞いてない？そこ！秋ベタベタしない！」

なにげに体育館は騒いでいた。

それもその原因はみつきが私に抱きついてることが原因みたいで。

「みつき……一回離れて？」

「しょうがありませんね。秋にそんな顔されたら嫌でも聞くしか有りませんから」

みつきが腕を放せば開放感が訪れた。これで体育館も静かになるだろう。部長達がまた今日はもうないことを話した。

＊

昇降口から見える大粒の雨が地面をうつ。
なんて雨……。

「そういえば秋傘持ってきましたか？」

「うーん。持ってこなかったよ。」

朝はいつもの時間にみつきが来てくれなくて心が不安定になった。そんな時に傘なんてもってくるはずがない。

「それは良かったです」

にこっと笑ったみつきは傘をさし私の手を引いた。

「もしかして……相合い傘？」

「いけませんか？残念なことに傘は一つしかありませんから」

はずかしいけど……どっちかというと優しくしてくれるみつきに返ってくれたから嬉しい。

「ねえみつきどうして午前中話しかけてくれなかったの？」

弱々しくも彼と視線を合わせることもなく問いかけた。

「それは…今日エイプリルフルじゃないですか。だからといって僕はあなたに言いたくないんです。」

「何を？」

「『嫌い』という言葉。いやなんです。その言葉は……」

現実を考えればみつきから一番聞きたくない言葉。

ただどエイプリルフルだから許されると思っててもその言葉は特別じゃない日でも言われそうな気がすると思うと胸が痛む。みつきは私をそういう風に考えてくれてる。

「ありがとう。みつき」

嫌われてしまったと思ってたのにそれはあなたの優しさなんだと気付く。

「みつき！私みつきのこと嫌いだから！大嫌いだから！」

「えっ……………」

「私はそんなに弱くない。ちゃんと行って？私はみつきの気持ちを知りたい」

みつきは困った顔をする。だけどすぐにっこりと笑った。

「僕は秋が大嫌いですから」

言葉だけで傷つくなんて自分はそれほどみつきが好きなのかも知れない。

だけど今日はエイプリルフルだもん。嘘を楽しまなくて何を楽しむの？好きな人とならすべてのイベントを楽しみたいと思うじゃない。

その言葉とともに、はにかむみつき。

「といっても、嘘をつくのは午前中だけなんですけどね」
「嘘！？エイプリルフルだからそれも嘘でしょ！」

みつきはクスッと笑う。肩と肩がふれあう。

「じゃそういうことにしましょうか？可愛くないですよ秋」
「それは本当でしょ？」

真っ赤な頬になった私をあなたはやさしく微笑む。
まだ雨がやみませんように……。

4日目 迷路は混じり合う（前書き）

綾華^{あやか}という女子生徒のお話です。

綾華はみつきと秋、蓮と周二と同じクラスです。

4日目 迷路は混じり合う

なんて軽い人たちだろう……それぞれ別々の人を愛していたのに
どうして ここで交わるのだろうか

（迷路は混じり合う（綾華主人公））

私の仲の良い真由まゆに好きな人がいることを知ったのは半年ぐらい前で私が彼を好きになったのと同じ季節。それは接触しない回廊を歩いているようで好きな人が被ることはなかった。だからといってこんな恋愛ありなんだろうか。

「秋（私もう何が何だかわからないよ!）」

昼休みには多くの生徒が教室に残る。かくゆう私（綾華あやか）もその一人です！目の前の席に座っていた秋はせっぱつまった私の言い方に苦笑いしかない。こっちの事情が分からないからだ。

「どうしたの？良かったら屋上で話す？」

なんて暖かい言葉。私の混乱状況にも動じない秋は素敵だ。しかしそんな暖かい秋の後ろには強敵が……。

「僕の秋をどうするつもりですか。相談事があるならばここですればいいでしょう。ここで」

現生徒会長及び学年主席。敬語キャラだけに潔白な笑顔。こいつに勝てる奴（勉強とか？運動とか？言葉を使った心理作戦とか……？）

は いないとまで言われてるボスキャラ!!

みつき!!!!!!

笑顔で地面を指さしつつこことはたぶん教室だろう。口調は明らかにいらついてる感が読める。

なんて独占欲が強い奴。「僕の…」とか使ってる時点で危ない奴だ。……というよりこんなやつが学年主席だなんて生理的に嫌だ。その潔白の笑顔から好感度は高い位置にあったが秋と付き合い始めてから地が出てきている。だけどそんな魔王のみつきにも弱点はあるよ
うで。

「みつき。大丈夫。すぐ戻ってくるから……。それに昼休みだから、人が多い教室より屋上の方が良いの」

すかさず笑顔を振りまく秋にみつきは一瞬たじろいだ。

こいつ……照れてるな。お前はかっこいい顔立ちの分類だから照れても可愛くないんだぞ。

「あっ秋がそういうなら別にいいかも知れませんが……」

「ありがとう、みつき。いこ!綾華」

軽々と言いくるめる秋。秋はボスキャラを越える最強勇者に違いありません。

私は秋ちゃんに手をひかれるまま屋上に向かった。

*

「みつき、おぬしもまだまだよのう」

「秋ちゃんだけには頭が上がらないってか? いつも主導権を握るみ

つきが珍しい」

一つの机を囲むようにしてトランプをしていた周二と蓮がちゃかをいれるように笑い出す。

僕だって本当は行かせたくないんですけどここで折れなかったら秋に嫌われる気がして……。秋に対して敏感になりすぎているのかも知れない。だけど今はちゃかをいれたこの2人に……。

「周二、蓮。これから優奈さんのところに用事があるんですがどうです？」

蓮が優奈を好きだと言うことを知っての僕の攻撃。これには2人も動揺した。

「へっ……すみませんでした！嘘です」

「みつきが黒っ！！」

否定をするがごとく首をよこに振る蓮にトランプのカードをきっていたのを無様に落とす周二。
動揺しすぎですね……。

「みつきの主導権は……秋ちゃんだけにあるんだったりして」

連と周二が囲んでいた机の隣の机に寝ていたはずの翼が眠そうに目をこする。

その言葉の的中率に僕は翼に一瞬殺意が芽生えました。

＊

屋上はあまり人けがないため、相談事にはぴったりの場所だった。

私と秋ちゃんは屋上で寝そべりながら空を仰いだ。昼休みが終わるまで10分。言いたいことは言ってしまうと思う。

「秋ちゃん：私ね。人ってこんなにも軽いんだって分かった。」

「えっ？」

いきなりどうしたの？と言いたげに秋ちゃんはキョトンとした。

「私の友達の真由ちゃんには好きな人がいたの。だけどさあ：：それが振られちゃって真由ちゃんが仲の良い男子にメールで相談したんだ。その仲の良い男子も好きな人がいたんだけどあきらめかけてたんだって。」

「そうなんだ」

それぞれが別々の人を好きだったのに：。私は空に浮かぶ雲を目で追った。

「真由ちゃんは秋ちゃんに付き合ってる人がいるって聞いて焦ってたらしいの。それで仲の良い男子に「付き合う？」って冗談でメールしたんだけど本気で受けとめられて「別にいいよ」って。真由ちゃんと仲の良い男子はこれでカップルに：。だけどそれらしいことはしてないんだよ？軽いと思わない？」

それらしいこと。一緒に帰りもしないしキスもしない。ただ楽しくメールするだけ。

別に好きでもないのに付き合った感じがする。それだったら付き合い合わないままで良いと思うのに：：。ただたんに「カップル」という名の優越感が欲しいだけに思えた。真由ちゃんと仲の良い男子はそれぞれ別の人が好きだったのに。

私の思いに秋は目を細めて下を見た。

「綾華……それはね。「愛」を重く感じすぎだよ。」

「えっ？」

愛を重く？ ということ？

私は秋に聞き返した。

「私みたいに両思いなんてことは今では奇跡だって思ってるの。相手の気持ちがあって、私の気持ちがある。それぞれ信用できる仲にあるから私はみつきが何をしてても信じてるの。それにそういう友好関係の仲に育まれる「愛」も有ると思うんだよ。まだ中学生だからお試しな付き合いがあっても良いと思うよ？」

お試しな付き合い……。まだ中学生。本場の愛はもっと大人になってからってこと。私は「付き合い」ってことにたいして理想的に考えすぎてた。

そっか……。

「秋ちゃんありがとう！ 私これから亜紀に謝ってくる『軽い女』ってつい言っちゃってさ。」

あの言葉を言ったとき亜紀ちゃんはとてもつらそうな顔をした。

私は悔しかったのかもしれない。でも重く考えてた私にも非があるから。

「そうなの？ ほら早く謝ってきな。私は少しここで空みていくから」「ありがとう！ じゃあ、また何かあったら相談するね！」

私は体をもちあげ秋ちゃんに軽く手をふりながら階段を下りた。
私の心はあの空のように晴れている。

＊

綾華が階段をおりていく音を聞きながら体を持ち上げて空を見上げた。

真由ちゃんのような子は好きというものを軽んじてる。小説や漫画のような純な恋愛はそうそう出来ない。

「みつきはお試しな付き合いとか思ってるのかなあ…」

大切に扱ってくれてるのは分かる。だけどそれは大人に成ったときのための練習にすぎないのかな…。

「常に僕は本気ですよ。将来は秋との婚約を夢見てますから。」

「そんな馬鹿なあ………ってみつき!？」

後ろを振り返ればあなたは優しい笑顔で迎えてくれる。

みつき…そんな登場、心臓に悪いよ。

「もしかして…最初からいたの?」

「いえ。綾華さんが降りてきたのを確認しましたので…」

そっか…あんま聞かれてなくて良かったかも。

みつきは私の隣に立ったかと思うと腰をおろした。

「みつき…そんなに人って軽い物なのかな。それぞれが別の人を好きでもその2人が付き合っちゃうんなんて」

私の疑問にみつきはとうしたんですか？と顔を歪めたが、特に深入りはしてこなかった。

「まあ…翼の言葉を借りるのなら『軋んでしまう』ですね。」

軋んでしまう？

私が考え込む仕草をしてかみつきは優しく微笑んだ。

「歯車が合わなくなるときがいずれあるんですよ。信頼しあってる仲だとそれを取り越えられるかも知れませんがそんな軽い仲では乗り越えられないこともあるんですよ」

2人でぶち当たった壁に2人でどう対処するかということ。

「みつきは一緒に乗り越えてくれるよね」

「当たり前ですよ。それよりさっきの答えもらってないんですが…」

「えっ？」

答え？なんか質問とかされてだろうか……。

「僕は将来秋と婚約するつもりと言ったんですが…？」

「……………」

どんどん顔がほてっていくのが分かる。

「お答えいただけますか…………？」

そんな……それは嬉しいんだけど……。私はあまりの恥ずかしさに顔を背けた。

「……中学生のくせにそれは早すぎ」

「そうですか？ 顔が朱くなってますが秋？」

「うっうるさい。」

私は立ち上がって背伸びした。

「ねえみつき」

「なんですか？ 秋」

「みつきはちゃんと迎えに来てくれるよね？」

その質問の意図をあなたは聡いから気付いてくれるでしょう？

「もちろんです。秋」

優しげに微笑むあなたはいつだって私を救い出してくれる。

もしかしたらこんな会話も信頼しあってる者同士しか出来ないのかも……。

ありがとう。みつき。

あなたと見上げた空はすぐ近くにある気がする。

「そういえば秋」

「どうしたのみつき？」

「後30秒もしないうちに予鈴になるんですが」

「早く言ってよー！！」

5日目 周二の悲劇（前書き）

みつきの友達ー周二はちやらい雰囲気を持っていますが実はいいやつなんです。

5日目 周二の悲劇

「秋 よかったらこれどうぞ」

「ありがとう！みつきからの初めてのプレゼントだね」

「……そうでしたか。ならもっと思いいに残る物の方が」

「いいの！みつきから貰った物ならなんだって嬉しいんだから」

「…秋 かわいいですね」

「うっうるさい！」

くあなたからの贈り物（秋主人公）く

やった！初めてのみつきからのプレゼント。だいたいもうなんてこと、みつきからは一度もなかったからなく。私はプリン片手にすぐ顔をほころばせた。嬉しい！！なんて今日は良い日なんだろう！そんな喜びに嬉しがっていると部室のドアが開いた。
だれだろう……？

「いった！秋！もう何してんのこれからミーティングでしょ！ほらほら早く早く」

「えっちょっと！」

「なんでプリンなんでもってんのよ。ほら置いてく」

優奈から強制的にプリンを取り上げられ部室のベンチに置かれた。

「それは大切な……」

「部室には誰も来ないから大丈夫だって！」

確かに…大丈夫だね。

横目でプリンを確認して優奈に手を取られて私は部室を後にした。

＊

部長からの急な呼び出しに急いでいたため帰りの準備をしていなかった。こうして部活も終わったため、いつも一緒に帰る蓮と翼をつれ教室に帰ってきた俺は蓮が楽しそうに何かを持っていることに気づいた。

「なあ　なあ！周二。このプリン食べて良い？部室にあったんだけど」

「いいんじゃない？」

「やった！」

子供のような声を上げながら蓮はプラスチックのスプーンを口にくわえ嬉しそうにプリンの蓋をあけた。

ガキかよ……。

そんな蓮を横目に机から教科書をバックへと戻す

「それってみつきのじゃない？」

うなだれて机に顔を埋める翼からの一言に俺らは目を丸くした。

「どうせ『しょうがありませんね』とか言いながら許してくれるって！」

蓮がふざけたようにみつきの物まねをする。似てないよ。それにみつきは怒るとやばいんだからな！

「いいのか？みつきは怖いぞ」

「周二そこは味方してよ！」

蓮はそういいつつも美味しそうにプリンを頬張る。その行動に翼はあっと言葉を漏らした。

もう知らないふりして良いぞ翼。

それにしても俺もお腹すいたなあ……。帰り道にでもコンビニによるか。

そう思つてはバックのチャックを閉めた。

よし！あとは帰るだけだな。

……ダッダッダ ガラッ！！

勢いよく教室のドアが開いた音がしたため反射的に俺達3人はドアへと目を向けた。

「みつきじゃん……。」

蓮が目丸くしてつぶやいた。慌てているのか肩で息をしている。そんなに疲れるまで走ってどうしたんだ？いつもはすかした表情で慌てることなどないみつきがこうも慌ててるだなんてなにが？

「僕の……いえ秋のプリン見ませんでしたか？」

そんなの見てないよ。俺はみつきに返事を返す。

「いや、見てないけど。どこに置いたの？」

「部室に秋が置いたらしいんですがなくなっているんですよ」

部室に？聞いたことがある場所だな。しかもごく3分前に……。俺達の学校のテニス部は部室が多いにも関わらず男女共同で使っていた。俺達もさっきホワイトボードに今週の計画を書くよう立ち寄

ったばかりだ。そう、そこで蓮はプリンを手に入れたと聞いたのだが。

横目で蓮を見るとギクリツと肩をふるわす姿が。もしかしてこいつ……。

「……蓮」

その姿をみつきも捕らえていたらしく、いっそう目が鋭くなる。みつきの観察眼はだてじゃない。

「そのプリンどこからもってきたんですか？」

「えっと……どこだっけ？周二？」

そこ俺にふる！？つい教科書を落としかけた。その動作にみつきは頬を引き尽かせた。

「周二。どうかしましたか？」

「えっ……」

「……分かりました。もういいです。」

なにがもういいですか！？みつきさん！！

「周二は蓮を守ろうとする癖がありますし。蓮…それは部室にあった物ですね？」

「……」

「はぁ……どうでしょうか？」

無言は肯定と取るみつき。みつきが溜め息をついた瞬間、また廊下から駆け出す音が聞こえガラッと扉が開いた。
今度は誰だよ。

「みつき！ごめんなさい。私」
「秋……」

いきなり涙目の秋ちゃん。
いったいこの2人はなにがあっただよ。

「私みつきから初めて貰ったプレゼントなくしちゃったの」
「はい。知ってます」

「彼女として失格だよね……って知ってるの!？」

「ええ。知ってますよ。秋のことは全て知ってます」

「みつき……。」

おいっ!?! 一歩間違えればみつきの発言はとても危ないぞ！
プレゼント？初めて貰った物？

「そんななくしたぐらいでしょげることないんじゃない？」

「私は！私にとってはとても大切なの！周二君には分からないかも
しれないけど……大切に」

今にも泣きそうな秋ちゃんについて失言したことを悔やんだ。

と言うよりその発言でみつきからの目つきが冷ややかになったのも
あるが。

みつきがさつきとは違う綺麗な笑顔で笑った。

「それより秋。目をつぶってくれませんか？」

「えっ？」

「いいから。目をつぶってください。」

「……分かった」

ゆっくりと目をとじる秋ちゃん。みつきは何をしようというのか。

「…………っ！？おい！みつき」

蓮のプリンを一瞬にして引き取りスプーンごと窓の外へと投げたではないか！？弧を描くように優雅とはいわずもうスピードで空へと飛ぶプリン。思わず見とれてしまう。蓮は蒼白した顔で魂が抜け落ちたように崩れたし翼も特有のポーカーフェイスを崩した。

「もういいですよ？秋」

「んっ分かった。結局なんだったの？」

「秋。それはこれを見てください」

みつきの手にはいつのまにか銀燭のブレスレットがある。

おいおいみつきさん。あなたピッチャー及び魔術師目指せるんじゃないですか？

「プリンはフェイクです。本当はこのブレスレットをあなたにあげたかったんです。ほら秋腕を出してください。」

「えっそうだったの？」

さりりとした笑顔をみせるみつきはなんて恐ろしい。

さっきまでのプリンボールが弧を描いたのは嘘のようだ。

みつきは慣れた手つきで秋の手を取りブレスレットを通した。

「思い出に残る初めてのプレゼントはいつまでも残る物の方が良いでしょう？」

「えっ…………」

「『初めて』のプレゼントだってことは忘れていませんから。僕は最初から嘘をついていたんですよ。そう、だからプリンが初めての

プレゼントなんてありません。まんまとはまってくれて嬉しいです。」

ちゃっかり良い感じに持っていくみつき。女慣れしてるだけある。秋ちゃんは驚いたように目を見開いた。

「ってことは全て嘘だったの？みつき！」

「驚いた顔も可愛いですよ」

「一人で慌てて損したじゃん。……でもありがとね。」

「はい？聞こえませんがもう一度良いですか？」

「嬉しいです！みつきからの物は大切にすって言ったの！！」

してやられたという顔をする秋ちゃんは照れ隠すように目をそらした。

なんか俺ら……邪魔っぽくない？

みつきと目があった。さっさと行けというような冷ややかな顔が目にとれて見える。

「おい。蓮。翼。行くぞ。」

「んっ……見てかないの？」

「馬鹿翼。周二の言うこと聞け。ここで行かなきゃかならず三途の川が聡明に写ることになるぞ。」

小声で話し気付かれないように教室からでる。

静かな廊下。さっきまでのほんわかした甘々しい空気よりはましか。階段を3人で降りた。ここまで来れば大丈夫かな？

「結局なんだったの？あのみつきと秋ちゃん。」

蓮がやれやれと言ったような表情で空を仰いだ。
全ての根源は誰のせいかな？蓮君？

「初めてのプレゼントはみつきの彼女にとって大切。それを蓮が食べたからみつきの彼女が困ったんでしょ？」

翼がやっかいそうにため息をついた。そのとおりだな。
秋ちゃんにとってその価値は高い。きっと俺らがあげた物では意味がないほどだ。

「というわけで蓮はこれから何があっても部屋にある物は勝手に食べないこと。いいか？蓮」

釘を刺すように蓮をにらみつける。

「マジで！？」

「自分で買え。こんな面倒事二度とゴメンだ」

「はぁ……分かった」

靴を履き替え自転車の駐輪場へと向かう。

もう辺りは暗い。そろそろ帰らなくては親から電話来そうだな。

「時間かかるのは嫌い……。」

翼が溜め息をついた。

「翼までえー。いいよ。もう！すみませんでした。」

「違う。そういう意味じゃない……。あれ……。あれ……。あれ……。」

翼が指さす先には俺の自転車。

そう自転車には型が崩れた物体がのっていた。

のっかていた……!??

パチツと言う音がして蓮が下を向く。

「プラスチック踏んじやったかな?あれ?これってスプーンじゃん!」

……………。

よく見れば俺の自転車の付近にもプリンのカップが。

「ありえねえ…。いつか見てろよ。みつき」

「……負け台詞?」

「翼…よせ」

その後、俺の自転車に乗った原型をとどめぬプリンを処理し家に帰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6183j/>

学校生活を君と

2010年12月14日20時58分発行